

Title	豊島与志雄「白日夢」論：大正期の居住空間への眼差し
Author(s)	張, 梓琳
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2024, 10, p. 9-12
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/98138">https://doi.org/10.18910/98138</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 豊島与志雄「白日夢」論

—大正期の居住空間への眼差し—

日本文学・日本語史学 博士後期課程1年

張 梓琳

## はじめに

豊島与志雄（一八九〇～一九五五）は、大正三年二月の第三次『新思潮』で「湖水と彼等」を發表し、作家デビューを果たした。文壇では早い段階から注目されていたが、流行作家になることはなかった。そうした中、紅野敏郎や中村真一郎は、豊島文学の重要性を論じ、その再評価に軸を置いている。<sup>1</sup>少しずつ展開されている豊島研究であるが、未だに考察が及んでいない作品が多く残されている。本発表で取り扱う「白日夢」（『新小説』一九二三・八）<sup>2</sup>も、これまで論じられることのなかった作品である。

同時代評価を見ると、内容の散漫さや作品に感心できない<sup>3</sup>など不評なコメントがある一方で、作品から「中産階級者のもつ暗鬱」を見出し<sup>4</sup>、時代の不安を呈した個人の心理が良く描かれている<sup>5</sup>と好意的なコメントも見られる。賛否両論であるが、いずれも内容について具体的な検討がされていない。

本作から読み取られる当時の社会状況や不安は如何に描かれているのか、作品分析による再検討が必要である。本発表では、作中における居住空間に注目し、「白日夢」の再評価を試みる。

## 一、長屋について

「白日夢」は、長屋に引っ越した「私」が隣家に間違えて入ったことにより、規格化された部屋の同一性に気づき、生活の類似や他人との類似のなかで、自己を見失う不安に陥る話である。これまで人物の心理描写が言及されてきたが、物語は長屋を中心に展開されていることがわかる。まず、「私」の不安を引き出した家の描写に注目したい。

---

<sup>1</sup> 紅野は「豊島与志雄入門」（『日本現代文学全集 第六十二』講談社、一九六六）において、昭和文学や現代文学の根本的な課題を、いち早く育んでいた作家であると論じている。（四一六頁）中村は「解説」（『豊島与志雄著作集 第一巻』未来社、一九六七）において、「豊島与志雄は近代日本の最も重要な作家である」と論じている。（五四五頁）

<sup>2</sup> 後に作品集『人間繁栄』（玄文社、一九二四）に収録されている。本発表における本文引用は『豊島与志雄著作集 第二巻』（未来社、一九六五）による。

<sup>3</sup> 水守亀之助・久保田万太郎・宇野浩二・菊池寛・加能作次郎「創作合評（悪夢・白日夢）」（『新潮』一九二三・九）

<sup>4</sup> 伊福部隆輝「豊島与志雄論」『現代芸術の破産』（地平社書房、一九二四）三九一頁

<sup>5</sup> 村松正俊「創作批評」『文芸年鑑（大正十三年版）』（二松堂書店、一九二四）一三四頁

「私」が引っ越した新居は、二階建ての長屋である。妻に子供と女中も含めて暮らすには決して広い空間とは言えない。それでも、「私」にとっては「相当な家」であることから、一家の生活は、あまり裕福ではないと考えられる。実際、「こんなちっぽけな借家住居」から自分の「無能さ」を感じ取るところから、家が人の経済力を示す符号になっていることがわかる。ただ、家の狭さよりも、「隣りの家と棟続き壁一重越しに、全く同じ形に建てられてる」ことに対して、「余りいい気持ではなかった」ことが述べられている。

隣家との密接な「距離感」と「外見の同一」は、「私」の家に対する不満の原因であり、「私」は何度も両家の造りが「同じ」であることを強調する。しかし、一棟の建物を複数に仕切り、棟続きで壁を共有するのは、長屋の一般的な構造であり<sup>6</sup>、家の造りの「同一性」は、長屋住宅としてごく普通のことである。にもかかわらず、「私」は家の外見の同一性から、両家の生活の同一性へと結びつけていく。

「箱を二つに仕切ったような長屋」の日本式住宅には、鍵やドア付きの個室はなく、薄い壁と襖で区切られた木造の部屋は、音を完全に遮断する機能を持たない。つまり、外部に対して家全体が「内」であり、そこに「個人」を確保できる空間は存在しない。更に、壁一重で「くっついたまま動きの取れない」造りは、隣家との密接さを示している。隣の門の開け閉めの音が聞こえてくることから、「私」の生活は隣家の生活音に干渉されていることがわかる。そのため、「私」は家に居ても常に他者を意識せざるを得ない状況に置かれる。加えて、「私」は隣人との面識がないため、その存在は不透明であり、隣の家に対する想像が膨らんでいく。

「私」は家の造りが同じという点から、お互いの生活を同様のものとして考え、隣家の生活を「見たい」気持ちと共に自分が「見られる」不安を抱える。そして、「私」が自分を隣家の主人と重ねて想像するところから、家の内部と外部の感覚の曖昧さが、他者との境界線の曖昧さに影響し、自己の主体性の揺らぎとして現れていることがわかる。

では、家の類似がどのように「私」の不安に繋がるのか。次に注目したいのが、自己を形成する名前と所有である。

## 二、名前と所有について

なぜ隣家が気になるのか、と妻に問われた「私」は、「家の形が似てるから」と答えたが、「そればかりではなかった」と心で案じていた。「私」の不安は、家の外見が同じであることをきっかけに、他人と同様な生活を送るなかで、自分自身を取違える恐れに発展する。

「私」は表札を取り替えても、「お互いの生活が今の通りに落付いてゆくかも知れない」と述べる。家の表札にある名前は、その家の主として認識され、「個

---

<sup>6</sup> 中原賢次「警視廳令第三號を基とせる長屋研究(一)」(『社會事業 三月號』一九二八)

人の存在」の証明となる。しかし、「私」は隣家との生活を自身と同等のものと考えている。そこで、「私達の生活」が「彼等の生活」となり得ることは、「私」と隣家の「彼」は、ほぼ等しい存在であることを意味する。したがって、「私」は「有村道夫とある隣家の表札を、可笑しな気持ちで」見ていた。表札の名前が示すアイデンティティの機能は意味を無くし、単なる「記号」に過ぎなくなる。「私」は画一な生活において、名前の無意味性を感じ、自分と隣家の主人とを「同化」していくことがわかる。

そして、「私」の存在意義への疑問は、「物質的にも精神的にも、全くの無産者」であることに起因している。無産者としての嘆きは、所有の無さだけでなく、生産性のない労働において、他人と取換え可能である自己の存在意義への不安でもある。皆が「真裸」になることへの想像は、「上下をつけて納まり返ってる」構造を壊し、リセットするという階級への不満が含まれていることが考えられる。このような破壊願望は、やがて「真赤な焰」の火事として現れ、不安の根源となる家の消滅の暗示として表されるのである。

以上の考察から、「白日夢」における居住空間は、単なる生活の容器や貧富の示しだけでなく、個人の存在意義を形成する一部として描かれていることがわかる。そして、長屋の特徴である他者との密接する距離感は、家の内外の感覚と自己と他者との境界を曖昧化し、「私」の自我喪失の不安に関連している。

このように、長屋という居住空間は作品の重要なモチーフだと言える。では、居住空間への着目は、大正期において、どのような意義を持つのか。最後に、同時代文学での家や個室の表象及び、生活改善運動の社会背景と併せて検討する。

### 三、同時代における居住空間への関心

一九二〇年における生活改善運動は、文部省の外郭団体である生活改善同盟会による展覧会や講習会、住宅調査などの活動が挙げられる。展示などにより、私密的であった生活空間は、人々に見られる対象となってゆく。このような生活を細部化して管理する眼差しには、国民の労働の生産性を高める意識が含まれていた。<sup>7</sup>本作における「私」の家への意識にも、自身が無産者であることが強く影響し、家に向けられた眼差しが、個人の内面にまで浸透している。

武田信明は、大正期において住宅や居住空間が「問題」として焦点化された理由を「明治が問題化した国家という空間が、不可視の存在と化したからである。」とし、「「国民国家」という虚構を、より精度の高い虚構として現実化させる」ために、大正が新たに焦点化したのは「植民地という広大な外部の空間」と、「国家の内部を解剖学的に検証してゆくまなざしによって顕在化される都

---

<sup>7</sup>『生活改善調査決定事項』（生活改善同盟会、一九二三）の叙言には「衣食住及び社交等に亘って在来の生活法を整理し其の様式を改善して一層合理的ならしめることは国民生活の向上活動能率の増進延いては国運の発展上今日の一大急務と存じます。」と記されている。

市の空間」であると指摘する。その上で、大正期文学における空間偏愛には、都市空間を細分化してゆく内向するまなざしが関連していると論じる。<sup>8</sup>

「白日夢」と同時期の文学には、個室空間の理想化や家を題材にした作品が多く見受けられる。例えば、佐藤春夫の「西班牙犬の家」(『星座』一九一七・一)では、西洋風の家に住む他者の居住空間への観察の眼差しが見られ、宇野浩二の「夢見る部屋」(『中央公論』一九二二・四)では、誰にも覗かれない個室を秘密の夢想空間として作り上げ、谷崎潤一郎の「痴人の愛」<sup>9</sup>では、洋館の文化住宅が描き出されている。

しかし、生活の模範として提示された文化住宅の生活は、当時の中間層の平均的な生活水準の実態からかけ離れていた。久井英輔は、新中間層の生活問題は、その中・下層においてこそ深刻なものであるが、新聞雑誌における生活改善関連の記事は上流の方々を対象とされていることを指摘している。<sup>10</sup>

以上のような、西洋風の住宅が題材として取り上げられている背景を踏まえると、「白日夢」における日本式の長屋は、より当時の一般的な居住空間を描き出していると言える。<sup>11</sup>長屋の特徴を拡大し、それを出発点に自我喪失の不安へ結びつけたことで、居住空間と個人の精神との関連は、住宅や個室への関心が高まる時代背景と重なる。更に、長屋の持つ部屋の画一性は、昭和時代の団地アパートでも見られる。規格化の居住空間と自我喪失の不安は、団地文学において共通な題材として用いられるのである。その一例として、「白日夢」と同様に家の間違いに端を発する自我喪失の不安を描いた、山川方夫の「お守り」が挙げられる。

## おわりに

本発表では居住空間に注目し、「白日夢」の再評価を試みた。「私」の生活への不安は、居住空間によって引き起こされており、長屋は物語の展開において重要な役割を果たす。規格化された居住空間を自己喪失の不安と結びつけて描かれている点には、画一的な生活は画一化された人間を生み出すという問題意識が含まれている。居住空間に注目することで、「白日夢」は当時の社会状況や関心のみならず、団地文学にも通ずる問題意識をいち早く描き出した、時代に限られない読みの可能性を持つ作品として捉え直すことができる。

---

<sup>8</sup> 武田信明『「個室」と「まなざし」：菊富士ホテルから見る「大正」空間』(講談社、一九九五)一六四～一六五頁、一八三～一八四頁

<sup>9</sup> 初出『大阪朝日新聞』一九二四・三・二〇～六・一四、『女性』一九二四・一一～二五・七

<sup>10</sup> 久井英輔「大正期の生活改善における〈中流〉観の動向とその背景」(『広島大学大学院教育学研究科紀要』二〇一二・十二)

<sup>11</sup> 石川俊「長屋の暮らし」(『東京下町の昭和史：明治・大正・昭和一〇〇年の記録』毎日新聞社、一九八三)一六八頁